

大岡昇平

昭和末

昭和末

大岡昇平

昭和末

一九八九年一〇月二六日 第一刷発行 ©
一九八九年一月二七日 第二刷発行

定価二五〇〇円
(本体二四二七円)

著者 大岡昇平

発行者 緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三・三五四二一
振替 東京六二六四〇

印刷・法令印刷 製本・三水舎

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-002672-0

目次

一九八五年	3
グリムを「おちよくる」	4
土佐日記	22
くるめきの反推	41
野上彌生子先生の霊前に捧げる	49
埋められない空虚	54
狡猾になろう	63
悪夢の構図から目をさまそう	71
一九八六年	75
『椿姫』ばなし	76
忠臣蔵・八犬伝	12
仕事のほとんどを……	39
自然へのまなざし	44
にがい笑いと慰め	51
野上先生との六十年	56
柔和な眼差	68
ブルックス現象	87

一九八九年 …………… 427

富永太郎の詩と絵画 428

愛するものについてうまく語れない

二極対立の時代を生き続けたいたわしさ 454

ひとむかし集 444

添え書 465

腐敗は隅々にまで達した 468

大岡さんは生きている——『昭和末』解題……大江健三郎 471

出典一覧

装丁 田村義也

昭和
末

一九八五年

クリムを「おちよくる」

「おちよくる」という動詞は、国語辞典ではまだ正統の位置は得ていないが、まずテレビの優才師が多用し、近頃知識人の間でよく聞く言葉である。「こけにする」「ていよくあしらう」というほどの意味らしい。少なくとも近刊の翻訳書Ⅰ・フェノチャー『だれが、いばら姫を起こしたのか——クリム童話をひっかきまわす』(丘沢静也訳、筑摩書房、一九八四年九月)の書評には使われているのだ。

東京堂『方言辞典』(一九五二年)では、「嘲笑する、あざける、からかう」を語義とし、奈良、和歌山、大阪、淡路島、香川、徳島を地域指定している。もっと広く関西に拡かっており、テレビ漫才で前記のように意味が狭くなっているようだ。そしてそれはもとの本の副題「ひっかきまわす」*verwittren*よりは適切に聞えるのだ。

著者はグリムの童話の代表的なもの十四を選んで、パロディと自称する語り替えによって、グリム童話のかくされた寓意をあばき出している。パロディの方法には、序文によれば三種あって、(一)文献学・原典批判の方法、(二)精神分析、(三)歴史唯物論、希望の原理によるとしている。著者はマ

ルクス主義者らしく、少なくともフランクフルト学派の同調者で、同地大学の教授だ。当然第三のものが多い。十篇かこの手でさばかれている。(『希望の原理』はむろんエルノスト・プロホ)。

グリム兄弟の蒐集したメルヘンは、古い伝承そのものではなく十七、八世紀末語られたもので、すでにブルジョワ的生産様式が確定した時期のものだから、この分析方法が有効なのである。グリムは保守的でロマンティックで、一八一九年の第二版、序文には「子供の年齢にふさわしくない表現はこの版からはいいねいに消しとりました」と断っている。日本人は最近マルクス主義に対して、アメリカ人と同じくらい拒絶反応を示すけれど、メルヘンを「おちよくる」ぐらいなら、それが面白いものであれば、よいのではないのだろうか。

私は一九八二年十二月、故『海』か、臨時増刊として「子供の宇宙」を特集し、好きな童話を一篇を選んで書けといわれた時、「ヘンゼルとグレーテル」を取り上げてみた。自分の幼時の読後感に忠実であろうと試みた。するとお菓子の家が欲望充足の夢として、話の中核であるように見えた。それだけでは文章にならないので、古典的な何合集雄『昔話の古層』(福音館書店、一九七七年)に助けを求め、魔女を太母、悪母としてみたか、どうもうまく行ったと思えなかった。その後B・ベノテルハイム『昔話の魔力』(波多野完治ら訳、評論社、一九七八年)などを読んで、どうも完全に納得するに到らない(ベノテルハイムは精神分析学者で、エス、自我、超自我の調和している昔話が一番よいという説だ)。ところかこん度フェノチャーの「おちよくり」によって、やや乱暴なやり方において

であるが、一応満足すへき結着を見た。

しかしそれを語る前に未読の人のためにフェノチャーのパロディ批判の見本を少しごらんに入れよう。

「オオカミと七匹の子ヤギ」は(一)により、「赤頭巾ちゃん」は(一)(二)によるとされている。この二つの話はオオカミが共通項で、「陰険て邪悪」な動物として見られているか、これは人間が勝手に押しつけた特性で、トマス・ホノブズの『市民論』(二六四二年)以来のものだそうだ。「ホモ・ホムス・ルプス」(人間は人間に対してオオカミである)。

人類は狩猟時代にマンモスなど巨獣を倒したやり方において、サルよりオオカミに近かった。しかし牧畜時代に入ると家畜ヤギの味方となって、オオカミは見付かり次第殺された。資本主義の競争時代に入っても、ホノブズのイデオロキーによって人間化され、同類嫌悪か、アリハイ作りのためか、ハンターによって必要以上に狩り尽されている現状は、B・H・ロペス『オオカミと人間』(中村妙子訳、草思社、一九八四年)に詳しい。

さて「オオカミと七匹の子ヤギ」は、悪いオオカミに七匹の子ヤギが吞まれてしまう。お母さんヤギが満腹して眠りこけているオオカミのおなかを銜て切つて子ヤギを助け、かわりに石を詰めておく。眼をさましたオオカミは泉の水を飲もうとして、身を乗り出す。石の重みで、水に落ちて死んでしまう、という話である。ところかある「進歩的」な「民俗学者」によると、これには先行する第一部があるそうだ。

それによると犠牲は七匹の子ヤギではなく子供のオオカミで、ある悪いヤギが来て、七匹を穴から誘い出し、角にかけて高い木の上に抛り上げる。子供のオオカミは木にぶらさがって位にいる。お母さんオオカミは木に登れないので、クマの老人に頼んで七匹をおろしてもらった。まもなく帰って来たお父さんオオカミが話をきいておこり、「おぼえてろ、仕返しをしてやる」といった。そこからグリムのお話が始まる、というのである。

教訓はオオカミもヤキも、人間たちから(傍点原文)、自分とちがう者や弱者を嫉妬し憎悪し迫害し、悪には悪をもって報いるべきだ、と教わっていたからだそうた。「人間は悪である、人間の先祖の動物がすてに悪であったから」という人には、「ヤギと七匹の子供のオオカミ」の話を聞かせるべきだ、という学者ふったお説教で終る。むろん民俗学者も先行譚もヨタテ——とも断定できないか、しかしその疑いがあるのがパロディの面白さて、グリムの語りの裏の意味が引っぱり出されて来るような具合なのだ。

「赤頭巾ちゃん」は残酷童話として、日本の大人によく知られているから、筋を紹介する必要はあるまい。上級の女の子のための、男への性的警戒訓を追加したペローの別語りかあるのも周知の通り。

これにも進歩的な民俗学者の発見にかかわる「忘れられたと思われていた、童話の断片」かあって、そこでは赤頭巾ちゃんには「赤捲毛くん」と呼ばれる兄さんがいることになっている。赤捲毛くんはそのため学校へ行くのをいやがり、いつもお父さんにぶたれていた。気のやさしいお母さん

は妹に赤頭巾をかぶせて、「赤頭巾」と呼び、赤捲毛兄さんの被差別意識をやわらげようとしたがあまり効果はなかった。ある朝、赤捲毛くんは寝坊して学校におくれたので、森の中に入って行く。ばったりオオカミに会い、いっしょに野いちごを摘み（赤頭巾ちゃんがお祖母さんのところへ行く途中にしたように）、二人でお父さんのところへ持って帰った。二人はほめられると思ったのに、お父さんは赤捲毛くんが学校へ行かなかったのに腹を立て、おとなしいオオカミの鼻面をこん棒でなぐったので、オオカミは逃げ出した。

赤捲毛くんもお仕置として、こん棒でなぐられ、家にとじこめられた。だから明くる日、誕生日のプレゼントとして、ケーキとぶどう酒をお祖母さんに届けるのは、赤頭巾ちゃん一人の役目になった。そこからグリムの「赤頭巾ちゃん」の話かはじまる。

オオカミは赤捲毛くんのために、お父さんに仕返ししてやろうと思った。オオカミは赤捲毛くんのお父さんが、ぜんぜん乳離れして（ここいらから精神分析の方法になる）、そのために気むずかしい夫であり、きひしい父なのだ、ということに「うすうす」気付いていた。そこで、この未熟な父親の母親（つまりお祖母さん）を呑みこんでしまうことにより、効果的なノゾクを与えようとした、ということになっている。

オオカミは犠牲者を噛まずに、呑み込み、あとで五体無事で取り出させている。父親にノゾクを与えれば目的を達するので、ほかの誰にも危害を加える気はなかったのだそうだ。

グリムの語りでは、最後に見知らぬ狩人かお祖母さんの家のそばを通りかかり、またもや飽食し

て眠っているオオカミの腹から、お祖母さんと赤頭巾ちゃんを取り出すことになっている。この狩人は明らかに父親自身である。つまり話の全体は、乳離れしない父親の見た夢なのだ。オオカミは父親の母親の身がわりなのだ。そして母親の腹を切り開くとは——以下延々と精神分析的悪ふざけとアンビヴァレンスへの逸脱的パロディが続くけれど、もう沢山だろう。好きな方は、原書によって見られたい。それはむしろ精神分析へのパロディでもあるので、ここで当世風に父親の役割がむやみと拡大されているところか私には興味がある。

パロディは物語に対する物語をもってするだけではない。批評においても有効で、特に両義性を持たせて、態度を留保する方が賢明な、メルヘンや神話批判において切れ味がいいことを理解していただければ、私は満足である。

ところで問題の「ヘンゼルとグレーテル」だが、フェノチャールは歴史唯物論で一刀両断にパロディしている。ここには二つの犯罪が行われている。父と母（一八四〇年の決定版から継母）による子殺しと、ヘンゼルとグレーテルによる魔女殺しだが、後者については、二人の子供の証言かあるのみだ、という推理小説仕立てになっている。森のそばに住む木こりの絶対的飢餓という封建的窮乏があるのに私は気付いたか、それは同時に魔女の存在が信じられていた時代でもあったのに、うっかりした（日本でこの話があいまいにしか理解されないのは、この前提が落ちているからだろう）。

ヘンゼルとグレーテルは、お菓子の家を食べるに任せた孤独で寛大なお婆さんを、魔女に仕立て

た。ヘンゼルに十分の食事を与えたのを、太らせてあとで食べるつもりだった、と根拠なく中傷した二人が許せないとフェノチャーはいう（飢えて瘦せっぽちだった二人を食べさせて、反抗する力を与えてくれたのに）。やすやすとパン焼きかまどに押し込まれてしまったことだけでも、魔女ではなかった証拠ではないか。その上、家中の宝石をポケトに詰めて持ち帰ったとなると、これは未成年者による強盗殺人だ、という。

もっとも気味か悪いのは、この童話が、百五十年ほど前から、美しい民話の一つとして名高く、確かな文学的評価を得ていることだ。批判の目で読まれることがなかった。しかしこれは「前ファンスムの大虐殺物語」である。資本主義の発達によって生活をおひやかされている小市民階級の心性、「わたしたちか生きのひるためには、子供たちに死んで貰うしかない」と考える母親のダーウィン主義、アウトサイダーから財産を取り上げてもよい、一つ家族民族だけ栄えればよい——これらの特徴は、すべて二十世紀において、特にドイツでは現実となった、云々。

私は依然として「ヘンゼルとグレーテル」か解釈し尽されたとは思えない。二人を導く鳥の役割、帰りに白い鴨に乗って川を渡る成人式まがいのパーフォーマンス、給して兄と妹の旅の物語の魅力、を忘れることはできない。ユノキストのいう太母とその役割の変換は無視できないだろう。最後に母親がいなくなる理由は遂に説明されないけれど、

しかしながら、はじめの子捨てにおける「父親」の共犯の美化は再検討されるべきであるとの、フェノチャーの指摘も無視することはまたできないだろう。童話が語り落したものの社会化なしに